

山
上
ア
ー
ト
セ
ン
タ
ー
カ
ン
セ
ン
タ
ー

2019



YAMA

YAMA

ART

CENTER

IN

PROGRESS

GRESS





山山アートセンターは、世界中の「山」をたよりに、
さまざまな人が力を持ち寄って
とにかく生きようとするプロジェクトです。
おもな舞台は京都府北部～広く山陰地域＝「このあたり」。
野望は、アートに軸足を置きつつ
「よくよく考えてみると実は福祉」という
さりげない施設をつくること。

INDEX

- 01 はじめに
- 03-06 孤独の山びこ
ー石神夏希(劇作家)
- 07-12 人が愛しくなるための距離
ーイシワタマリ(山山アートセンター代表/美術家)
- 13-14 よりあいみだけサロン
ー古川絵美(作業療法士)
- 15-18 キッチンクラブ・月に一度の持ち寄りご飯会
ー笠間弥路(美術家/彫刻家)
- 19-20 いろいろ延期になったこと
- 21-22 噛み合わなさど向き合う
ー奥山理子(みずのき美術館キュレーター)
- 23-24 タカハシ 'タカカーン' セイジさん(すごす人)インタビュー
- 25-26 これは何の話なんだろう？
ー公庄仁(クリエイティブディレクター/コピーライター)
- 27-28 このあたりにいる私達へ
ー青木彬(インディペンデント・キュレーター)
- 29-30 いろんな誰かが、入れ替わり立ち替わり。
- 31-32 2019年度の活動記録

孤独の山びこ

石神夏希(劇作家)

もはやユーモアに転換しなければ 周囲とコミュニケーションがとれない、という哀しみ

山山アートセンターの存在は設立直後から知ってはいたが、興味を惹かれたきっかけは「ひょうたん」だった。主宰のイシワタマリさんから、自分の住んでいるところでは「アート」といってもなかなか伝わらない、だからひょうたん畑をやるんだと聞いた時は、すごく面白いと思った。その理由を説明してもらっても、なかなか「わかった!」とは言えなかったけれど、どこか直感的に「この人は大真面目だし、これは本質的なことだ」と感じた。わからなかったからこそ、まだ見ぬ山山アートセンターに足を運んでみなければならぬ、と強く思った。

それから何度か、山山アートセンターのある福知山の三岳地区を訪れた。いわゆるアーティスト・イン・レジデンス(AIR)は、これまで国内外で何度か経験してきた。たいていが民家で、空き家もあれば、家主のいる家に居候することもあった。長期で滞在する場合には、家主の日常生活と重なり合う部分も出てくる。私はその土地に住んでいる人たちと、彼らの営みを素材として演劇をつくるので、日々の営みを共にすることが「稽古」の一部でもあった。一緒に食卓を囲んだり、子どもを保育園に迎えに行ったり、運動会など地域行事に参加したり。生業の浮き沈みや家庭の事情、病気や死に接することもある。だが山山アートセンターほど、子育ての奮闘や日々の家事といった「そこにある暮らし」の重力にどっぷりと飲み込まれたAIRはなかった。それは現状、山山アートセンター=イシワタマリだからだと思う。はたと気がつく「あれ? 私アーティストとして何も仕事してないじゃ…」と呆然とすることもあった(そんなに長い滞在じゃなかったけど)。

でも、それが彼女のリアリティなのかもしれない。実際には不器用のかたまりみたいなマリさんは、よく知らない人の目にはたぶん器用に面白おかしくやれているように見えるから、苦勞も多いのではないかと思う。山山アートセンターの「このあたり」という定義も「とにかく生きよう」というスローガンも、あるいはトークシリーズに冠せられた「噛み合わない」というキャッチフレーズも、血みどろなほど切実なのだ。けれど、受け取る人がどんな場所でどんなふうにいるかによって、意味合いが随分変わってしまう。「ひょうたん」もしかり。世界があまりに不条理だから、悲しいほど真剣に、必死に発せられた言葉ほどナンセンスに聞こえてしまうという構造と、本人も現実社会に生きている以上もはやユーモアに転換しなければ周囲とコミュニケーションがとれない、という哀しみが根底にある。気がする。



探すことが探されること、救うことは救われること

以上は私の勝手な解釈だ。その上でさらに勝手ながら、今後の山山アートセンターについて、いくつか提案をしてみたいと思う。

第一に、この先「イシワタマリが中心に居ることは居るが、本人が知らないところで、集まってきた人たちが勝手に出会ったり、何か一緒に始める」みたいな状態になると、面白く自走していく気がする。「開きかた」は「手放しかた」なのだ。そのために人間ひとりの手に負えない（目の届かない）広がりを持った時間と空間は有効だ。そんなわけで、やはり「アートセンター」を物理的に立ち上げる空間として、ひょうたん畑に期待したい。新型コロナウイルスの影響で主催ツアーが延期になり、空いた時間で宿望だった畑の開墾にも着手したようだ。マリさんの言う「このあたり」全体で、そうした空間が棚田のように山中に点在する情景は、アートセンターのありようとして美しいと思う。

第二に、私はイシワタマリの言語感覚、特にネーミングセンスを愛している。先述の通り「ボケ」的というか「言いつ放し感」が魅力的で、ただ、それを拾って打ち返す人が足りていない気がする。今後はそれらを誰かに拾ってもらって（渡して）、誤解・曲解と共にずれていくことを許容しながら表現していってもらうのはどうか。山山アートセンターはイシワタマリの作品（アートプロジェクト）なのか、そうではないのか。もしも作品ならばアーティストとして、どこからどこまでを作品（あるいは作家性）と捉えるか、という枠組みを問い直す挑戦も含むだろう。これもまた「手放しかた」の話かもしれない。

第三に、これは提案というより自分の興味関心だが、改めて「山」と向き合ってみるのはどうか。山山アートセンターは、これまでもインドなど「よその山」と連携したりもしている。日本の国土は約7割を森林が占め、そのうちの結構な面積が大なり小なり「山」だ。私たち一人ひとりのちっぽけな暮らしは、長い目で見れば見るほど地形と深く関わっている。民俗学者たちの研究からも、日本の文化がいかに山と豊かな関係と築いてきたかがわかる。地政学や、地球科学から考えてみるのも面白い。それに山には、海とは違う官能性がある。三岳から見える山に向かって『山のあなた』を朗読してみたい。などなど一度、名前とベタに向き合って「山」からアートセンターの意味を掘り下げてみるのも悪くないと思う。

「孤独にしない、ならない」という言葉が、ここ数ヶ月のマリさんとのオンラインミーティングで幾度となく出た。探すことが探されることで、救うことは救われることなのだ。イシワタマリは、返ってくるかこないかわからない山びこを待てる人ではないと思う。たとえ迷惑がられても別の誰かの孤独を見つけにどこまでも山踏み越えて行く、そんな山山アートセンターにこれからも期待したい。



石神夏希 NATSUKI ISHIGAMI

劇作家。関東を拠点に小倉、高松、舞鶴など国内各地や海外に滞在し、都市やコミュニティのオルタナティブなふるまいを模索する演劇やアートプロジェクトを手がける。その土地に暮らす人々の営みを観察し対話を重ねながら、日常の空間を舞台に当事者が本人を演じるパフォーマンスを立ち上げることを得意とする。最近の仕事として、東アジア文化都市 2019 豊島『Oeshiki Project』、2019 台北芸術祭 ADAM Artist Lab ゲストキュレーター等。鬱病及び統合失調症で幻聴・妄想と共に暮らす父をはじめ、精神疾患を持つ家族と向き合ってきた経験を持つ。

人が愛しくなるための距離

インワタマリ(山山アートセンター代表/美術家)



山奥には人が少ない

人と人が集いつながることを志向してきたという意味では、「とにかく集えない」というコロナ禍の状況は痛い。でも、ならばこそ、これほどまでに山奥の畑という場が活かされる境遇があるのか？朝の検温、手洗いうがい、マスク着用・・・といったお馴染みの方法で各々の懸念をクリアしたすえに、私たちはそれぞれにそれぞれの今日いちにちの過ごし方を選択しなければ

ならない。他者との「適切な距離」を取りながら。「適切な距離」・・・！

6歳の頃から満員電車で舌打ちしたりされたりして人格を形成してきた私からしてみれば、山奥は「適切な距離」の見本のような場所だった。あまりにも人が少ないせいで、そこで出会えたすべての人の存在が愛しくなる。

そして鹿がたくさんいる

三岳山一帯は1300年前に修験道のメッカとして栄え、かつては山伏たちも生活していたらしい。「里山」というより「山」。数年前に長老から「私たちの先祖は農業をするためにここに移り住んだのではない。山の守りをするために移り住んだのだ。」と言われたけれど、たぶんほんとうなんだと思う。そして、そのとおり、壮大な山の前で人間はあまりにも非力で(そのことがかえって私を安心させるのではあるが)、初心者の畑

に適した土地とはとても言えない。とくにここ数年は獣害被害がとみに増えて、老人たちの豊かな経験値さえも覆ってゆくほどのことから、都市部育ちかつズボラでどんくさい私ごときには挫折要素が多すぎる。かくして、春に植えつけたジャガイモが夏には鹿やイノシシに食い荒らされ、それを境に多忙にかまけて畑を放置したまま秋冬を越してしまった。



世界がそれどころでなくなった今こそ

この1年間、山山アートセンターが取り組んだことは大きく分けて3種類。ひとつめは、拠点とする三岳地域の高齢者をおもな対象とする「よりあいまたけサロン」を毎月開催してきたこと。ふたつめは、都市部の若者をおもな対象に、ゲストとともに福祉施設を巡る「福祉とアートの噛み合わない合宿ツアー」を準備してきたこと。みつめは、おもに丹後地域での要望の声を受けて、「京都府北部版“注文をまちがえるレストラン(※)”」の実現に向

けた勉強会やトークイベント、ワークショップなどを重ねてきたこと。後者ふたつに関しては、イベントが実施されるはずだった3月、「コロナ禍」によって世界はそれどころでなくなってしまい、計画は次年度に延期した。ところでこれら3つの取り組みに、じつは見えづらいところで通底しているのが「畑」の存在。これについては「世界がそれどころでなくなった」せいであって一歩前進したように思う。

ひょうたんからこま計画

…遡ること3年前、すべての鍵は「ひょうたん畑」にあると確信し、「ひょうたん畑」によって福祉とアートを横断せんとする一大計画を掲げた。名づけて「ひょうたんからこま計画」。それはなかなかどうして大風呂敷で、そこから先は、ひょうたん栽培の一連の流れを体験しつつ、福祉とアートの噛み合わなさに向き合いつつ、あちこち飛び回ってありとあらゆる人と出会ってこの計画について話した。そして何よりもどうしても、

私個人の事情でいうならば、私は子育て中の主婦だった。言い訳すればキリがないが、元来ズボラでどんくさい私にとって「畑作業」はどうしても後回しになりがちなのであった。個人的にはそうなのだが、この計画の根底には「そもそも畑は自分たちだけでやろうとするべきものではない」という考えがある。

※注文をまちがえるレストラン：「認知症の人たちがホールスタッフとして働くレストラン」として2017年に東京で行われたのが「注文をまちがえる料
京都府広域で仲間を増やしながら開催を重ねてきた『注文をまちがえるレストラン』を府北部エリアに見合ったかたちで展開するための準備を行なってきた

理店』。認知症の母親をもつ平井真紀子さん(まあいかりlabo代表)がこのプロジェクトに出会い、京都で始めたのが『注文をまちがえるレストラン』。
た。3月開催予定だった『京都府北部で“注文をまちがえるレストラン”を始めるための交流会』は次年度に延期。



みんなで、生きる。

「自分たち」の単位にもいろいろあろうけれど、例えば「自分と夫と幼い子どもたち」とか「この地区の住民」という区切りかたは違うと思っていた。畑は「みんなで」やらなければならない。「家族」の枠も「住民票の場所」の枠も越えたみんなで。しかも区画に割って使うのでは意味がない。畑偏差値の高いひともいれば余計なことばかりするひともいれば端っこで遊んで

いるだけのひともいるような、年齢も性別もいろいろなそれぞれがてんでばらばらに広い大地を使って勝手にすごす、そんな実験の場としてこそ畑が機能するように思えた。

真っ昼間から余裕で柵を飛び越えていく鹿の家族たち。網とか柵というよりも「嚴重なバリケード」を張り巡らさない限り、野菜はひと晩のうちに跡形もなく

食べ尽くされてしまう。「ひょうたんはさすがに食べないらしい」という噂も虚しく、ある日柔らかい芽は摘みとられた。獣たちと知恵くらべをしながら「みんなで」七転八倒すること。非効率の極みでもありながら、そこに「みんなで生きること(動物さえも含めて)」にまつわるあらゆるクリエイティブな可能性を感じてしまう私なのである。

イシワタマリ MARI ISHIWATA

山山アートセンター代表、美術家。1983年横浜市生まれ、福知山市在住。慶應義塾大学で「スピリチュアリティにまつわる社会学」を学んだのち、2007年から2009年にかけて、スペイン北部/バスクやベルリンで絵画やパフォーマンスなどの創作活動を行う。2015年以降、京都府北部〜広く山陰地域=「このあたり」を舞台に、さまざまな人が力を持ち寄ってとにかく生きようとするプロジェクト「山山アートセンター」構想を展開。2018年より高齢・障害・児童の複合福祉施設 Ma・RooTs(みねやま福祉会/宮津市)広報兼アートコーディネーター。

よりあいまたけサロン

古川絵美(作業療法士)



福知山市の山間の里、三岳地区に住む方々の集い・通いの場であるよりあいまたけサロンは、山山アートセンターが主体となって呼びかけを行われており、だれでも参加できる地域交流の場である。場所は三岳会館。開催日時は毎月第2木曜日。時間は13:30～15:00の90分程度。主体となる山山アートセンターのイシワタさんをはじめ、川口地域包括支援センターの高岡さんや細見さん、そして私、古川も昨年参加している。

よりあいまたけサロンの最大の特徴は、参加される地域の方々が、主体的にみんなで楽しみながら創り上げているところだ。サロンには、そういった雰囲気・仕掛け作りがいくつもある。

去年の夏、ある参加者の女性が言った「膝が痛くて下に座られへんわー」の一言から、みんなで「牛乳パックを使った椅子作り」を始めることになった。作り方があやふやなスタッフや参加者の女性達。それを見かね、作り方に詳しい方が助けにきてくれ、それをきっかけに格段に作業が進んだ過程には感動した。

そして何より印象的だったのが、スタッフとして参加していた細見さんが「私、すごく今楽しいです!」と今まで無い胸の高鳴りを言葉で表現されたこと。みんなで一つのもの作るという作業は、一体感をもたらし、感動を与えてくれるものであった。会の終盤、一人暮らしの女性は、「私これ持って帰って家で試してみるわ。」と、作りかけの材料を自宅に持って帰られた姿に、新たな作業の広がりと役割の創出を感じた。こういった場面を見ながら、ふと思い出した言葉がある。

「人間らしさ」。

かつてアーツ・アンド・クラフト運動の先導者であるウィリアム・モリスは“芸術的な手仕事による美しい日用品や生活空間をデザインし供給することで、人々の生活の質を向上させる”と言った。三岳の方々の丁寧な作業風景はそんなモリスの発言を連想させた。

これからもサロンに参加される方々のいきいきとした人間らしさ・自分らしさが大切にされる場であってほしい。

古川絵美 EMI FURUKAWA

作業療法士。1986年生まれ、福知山市出身。学生時代に怪我をした後、リハビリを受けたことがきっかけで作業療法士に。京都市内の総合病院での勤務を経て2015年にUターンし綾部市立病院に入職。「自分らしく生きる」を支える仕事として作業療法士の仕事の魅力を発信するべく、周囲を巻き込みながら作成した「作業療法士Atoz」が話題に。現在は医療現場のほかに、綾部市認知症初期集中支援チームでの活動や認知症カフェのアドバイザー派遣事業にも携わる。2019年より三岳地区在住高齢者をおもな対象とする「よりあいまたけサロン」に度々参加。

キッチンクラブ

月に1度の持ち寄りご飯会

笠間弥路(美術家/彫刻家)

海を見ながら誰かの作ったご飯を食べる。

私はよそ者で、よそ者が毎回いる会。

私たちは食べ物を共有する。

2019年の9月から月に一度、複合福祉施設マ・ルートでひとり一品持ち寄りご飯会・キッチンクラブを開いている。参加者は私、イシワタさんと、施設利用者や職員さんがちらほら、地域の方がちらほら。チラシの案内文にはこうある。

「甘さも苦さもしょっぱさも、みんなで分かち合っ楽しんで。

世界のびのび広がります。どなたでもお越しください。」

キッチンクラブという命名は、食べるだけに留まらず、ご飯のその先やその後ろに秘めた人々の交わりのある場にしたいという願いを込めている。美味しかろうが美味しくなからうが、それらを受け入れ他人のご飯を食べれば良い。人には揺らぎがあるものだ。

初めはおかずを持ち寄りながら、ご飯のイベントの企画につなげていくことを念頭に話していたが、そもそもよそ者の、料理人でもない私がいきなりそこへ向かおうとするのはやや唐突なのであった。

私はただ、誰かわからない所属の曖昧な人。会場である福祉施設の利用者家族でも職員でもない。近隣地域住民でもない。「毎月2時間かけておかずを持参でやってくる人」である。唯一私に向けられた目はきっと、「アート」寄りの人。「アート」という偏見をまずは少しずつほぐしたい。

福祉とアートそれぞれの余白を共有する場だと思っている。

—

毎月通うと、毎回考えることが新しく出てくる。

こんな事がしたい、こんな風になればいいという理想と、これならできる、こうなった、という緩やかな現実の間を継いでいる。文字にすると当然のことながら、毎度改めて気付き直す。

福祉、アート双方の幾つものレイヤーをひとつずつ捲る。恣意的な理解、またはそれに基づく行いがなかったかと振り返る。説明のつかない日常の出来事は、「福祉」でも「アート」でも無く、ただ日々の生活である。自立した意志と身体経験の重なりがそれぞれ日常の中に生み出され表れることが生活なのだ。

生活への眼差しに変化をつけること、自発的な変化に目を向ける力はアートと呼べるのかもしれない。



3月に予定していたキッチンクラブは、新型コロナウイルスの影響で中止になった。

この数ヶ月の間、私たちは世界がゆっくりと崩れていく様子を、目の当たりにしている。休校になった小学校の、行き場のない給食のことを思いながら、お弁当を作っていた。子どもたちは授業のない学校で遊び、公園で遊び、さほどいつもと変わらなかった。ここから恐怖はよく見えない。

それもそのはずで、ここにいる子どもたちの生活が恐怖の中に沈まぬよう、子どもを囲む大人達は自分の身の回りの物事を選択するのだ。

それでも恐怖は形を変えて毎日に滑り込むのだと日を追うごとに感じるのである。3月の終わりを迎える今、個々に滑り込んだそれはだんだんと実を結びつつある。そして、それに抗うように私は毎日ご飯を作っている。

三岳でイシワタさんは畑をすると言っていた。青空の下でなら会えると。残念ながら、私たちは青空の下でも会う事はしばらくできそうにない。私は家で夏のために庭先のレモンを塩漬にし、来年のための味噌を仕込む。私なりの方法で冬を仕舞い春を迎える。私の身近に耕すほどの畑があったことはない。大地に触る事に馴染みのない育ち方をしたし、家に招いた植物は次々と枯れた。母は野菜を作る事はなかったものの野菜信者であった。野菜を取れば取るほど強く正しくなれるかのように妄信していた。幼い頃からの精神的な慣習は古いおまじないのように引き継がれ、私は野菜や果物、作物を心底頼っているのだ。身体と自然や外界、他者を繋ぐ唯一無二の媒体として。

子どもの頃の私は踊りながら生きていた。あれは私を生かしていたのだと、この頃よく考える。小学校の帰り道も、バスを待つ時間も踊っていた。言語化できない日々のあらゆる事象の歪みや高揚を身体に落とし込みなんとか生きていたのだろう。「虫になりたい、バッタになりたい」とノートに書きつけたことを覚えている。食べるものと同化する姿、生きていることをそのままに表す跳躍に心から憧れていた。

大人になった今、子どもたちの遊び、福祉の美術、畑という作業、食を支える労働といった営みは身体の経験が自己の分裂や精神の崩壊を防ぎ、心身の融合を支えるものと捉えている。人間は非合理的な事象を生きている。

2020年3月のある暖かい日、私は大豆を鍋にかけ続け、豆をつぶし、麴をきり、耕すように混ぜ合わせる。人肌の豆は心地良く、一年後の未来を健やかに思い描く。レモンの香りは夏の予感に満ちている。

三岳の山ではイシワタさんが畑を整え、鹿柵をたて、ジャガイモを植えている。山の景色を想像する。その山の向こうの海の景色を思い直す。

2020年の3月に寄せて



笠間弥路 MIRO KASAMA
美術家/彫刻家。1983年宮城県生まれ、京都市在住。長女の育児中の孤独に行き語る中、子どもとのコミュニケーションにおける美術の可能性に惹かれ、2014年頃から子どもとの共同制作を始める。造形教室講師など。

いろいろ延期になったこと。

この数年間フクシマが先進国めいて見えるのは、人々が被ばく(の可能性)という見えない恐怖と共存してきたせいだと思う。見えない、ゆるやかな恐怖。いま地球上を襲っている「コロナ禍」がまさにそれ。だけど山山アートセンターは山山アートセンターであり続ける。なにしろ、私たちが誓っているのは、

「何が起きてもとにかく生きよう」

それだけだから。

次年度に延期して開催を予定しています。

福祉とアートの 噛み合わない 合宿ツアー

2020年
3月3日(火) - 4日(水)

みずのき美術館 (亀岡)
障害者支援施設みずのき (亀岡)
障害者支援施設かしのき (亀岡)
山山アートセンター (福知山)
金光寺 (福知山)
複合福祉施設マ・ルート (宮津)
ほか

案内人たち:
藤本裕 (インディペンデント・キュレーター)
奥山理子 (みずのき美術館キュレーター)
笠間弥路 (芸術家/彫刻家)

タカハシタカカール・セイジ (宮津)

伊シワタマリ (山山アートセンター代表 美術家)

各拠点単発参加:
800円(学生もしくは22歳以下) / 1,500円(一般)

※飲食費実費が別途かかります。

学生もしくは22歳以下 1,500円
一般 3,000円

主催：山山アートセンター／協力：社会福祉法人松花苑、社会福祉法人みねやま福祉会 Ma・Roots (マ・ルート)

みんなで生きる。 Let us live together.

関西圏にいても意外と知らない京都府の奥の山奥(福知山・宮津)を1泊2日で無しながら、24時間楽しめるツアー。

アート×福祉×ときどき煙。関西圏にいても意外と知らない京都府の奥の山奥(福知山・宮津)を1泊2日で無しながら、24時間楽しめるツアー。

応募はこちらから!!!

噛み合わないさとうき合う

奥山理子(みずのき美術館キュレーター)

大変な事態になった。

誰も予想だにしていなかったはずである。

いや、そうでもないのかもしれない。

新型コロナウイルスではなかったとしても、もしかしら私たちは、このような世界中の混乱が遅かれ速かれやって来るのではないかと思っていたのかもしれない、そんなことを最近よく考えるようになった。それと同時に考えるのは、一人ひとりの日常という基盤はなんとも脆く、また脆いがゆえに、絶対に保障されなくてはならないと、いうことについてである。

3月3日、4日に予定していた「福祉とアートの噛み合わない合宿ツアー」は、そうした人間の尊厳にまつわるアジェンダに対して、対話し、議論し、体験を共にしようという企画だった。そして、障害のある人たちや年齢を重ねたお年寄りたちの暮らす施設がその会場となるのが、何よりも重要な説得力となるだろうと、計画当初その期待感に高揚したことを改めて思い起こす。

しかし、私自身の心境にも、開催時期までの間に大きな揺れが生じた。文化的なアプローチで福祉を考察しようとするイベントは、私たちにとっては大変意味のある試みであるものの、福祉施設の現場(職員)にとっては、どのような意味がもたらされるのだろうかという問い。また、会場の一つである社会福祉法人松花苑の職員でもある私は、そのとき、アート側の視点が優位となるのか、福祉側の視点が優位になるのか、どのような立ち位置が自他ともに望ましいのだろうかという悩み。みずのき美術館開館以降、さまざまな経験を通して、気がつけば私は、ふんとアートの価値観、言語に馴染みを覚え、また実際に用いるようになっていた。そしてこの気づきは私を今までに感じたことのないような違和感で苦しませ、次第に、自己喪失の状態に陥っていくのを感じたのだ。

私がみずのき美術館のキュレーターとして従事するうえで個人的に意識していたテーマが、まさに「福祉とアートの噛み合わないさとうき合うこと」であった。明確な言語化ができていたわけではなかったので、イシワタマリさんが始めた同名のトークシリーズを知った時には、非常に大きな共感と衝撃を覚え、この企画に参加できることに喜びを感じた。そして、噛み合わないさの先には、必ず相互理解と新しい協働のかたちが見出せると信じてきた。この思いは、今も変わっていない。しかし、その到達を少しでも急ごうとするものならば、途端に両輪だと思っていたそれぞれの持つ車輪の大きさや速度にはズレが生じ、進もうとしていた道は反り返るようにして二手に分かれてしまう。そして、往々にして急ごうという焦りはアート側から起きるのだ。それくらい、アートは観察力が鋭く、リアクションが速い。長年そのような事態を経験し、辛酸をなめてきたからこそ、そうではない新たなストーリーを目指していたはずなのに、気がつけば、私自身が、アート“的”な価値観と速度で福祉現場に入って行こうとしていたのではないだろうか。あるいは、福祉分野の代表者“然”として、アート(非福祉)に福祉現場を紹介しようとしていたのではないだろうか。

本当は、私は、何を見てもらいたいのだろう。

本当は、私は、何を伝えたいのだろう。

本当は、私は、何を語りたいのだろう。

本当は、私は、どうありたいのだろう。

もがき苦しんでいた最中に起きたコロナ禍によるツアー企画の延期。この事態は、思いがけず私が自分自身の有り様をイチから見つめ直すための貴重な時間(猶予)を与えてくれることとなった。その作業は今なお苦しみを伴うが、この時間こそ、アートと福祉を思考することと同義であると信じたい。



奥山理子 RIKO OKUYAMA

みずのき美術館キュレーター。1986年京都府生まれ。母が障害者支援施設みずのき施設長就任に伴い12歳より休日をみずのきで過ごす。施設でのボランティア活動を経て2012年みずのき美術館の立ち上げに携わり、以降企画運営を担う。

Q. 山山アートセンターとの出会いを教えてください。

数年前、どこで知ったのか「福知山に、山山アートセンターというところがあるらしい」というのを記憶していました。大阪から鳥取だったかに車で旅行しようと走っていたら、福知山という文字を看板に見つけて思わず、あ、ここになんかあったよなど、なんやっけと記憶を辿り、思い出してウェブで検索してみるもはっきりとした住所が出てこず、おずおず諦めました。そもそも、福知山という単語を記憶できていたのは、新卒時に勤めた会社で担当していた営業エリアのひとつだったから。工業地域しか訪れたことはなかった。「辿りつけなかった山山アートセンター」・・・と、ここでうっすら意図を汲み取りました。ない、けどある。ないとは言い切れないし、実際ありそうだ(から検索した)し。また、出会うチャンスはあるでしょう、と。そして2年前、それまでも顔見知り程度ではあったイシワタマリさん(こと山山アートセンター)に再会した際、ぼくが「福祉施設を自分でつくってやってみたい」旨を伝えたら、思いのほかイシワタさんも同じことを考えてることがわかって、今に至ります。

Q. タカカーンさんが思い描く「福祉施設」って？

ぼくは、イベント企画などの表現活動と、障害福祉分野における創作支援の仕事をほぼ同じ時期に始めたのですが、「二足のわらじ」ではなくそれらを統合できないかと考えるようになりました。「芸術」を出発点にするともみなどうしても「おもしろいことをしなきゃ」と苦しむ。でもその前に、まずはそこにいる人同士が肯定しあう場が大切で、実はその安心感が創作にもつながると考えてます。「すぞす」ってことがテーマ。目の前の人との「すぞす」を重ねていくうちに、そこに見合った福祉制度を組み合わせていけるんじゃないかと思って・・・コンセプトは「だんだん福祉施設になる(かもしれない)センター」。ただ、これって構想を話し出すとどんどんと彼方に思考が飛んで行ってしまうし、実際にやるほうが伝わるような気がしています。僕の出発点は「障害福祉」だったから「高齢者福祉」の経験はまだないけど、それとは別に滋賀県の限界集落で「古屋の六斎念仏踊り」復活継承事業にかかわった経験の影響を受けていて、都市部でなく高齢化した限界集落だからこそできるようなことについても考えてます。

Q. 以前、「山山アートセンターはイシワタさん自身がケアされる場所であるべき」と言ってくれたことがありました。それについて、もう少し教えてください。

中心にいる人が強くないほうがいい、ということだと思います。「福知山を愛してから行く」のでは一向に行けないけれど、イシワタさんに惹かれて行くってことはある。そして、イシワタさんに惹かれてしまうのは、悩みに共鳴するからだと思う。うまくばっかりいっているところって敬遠してしまうとか。知らない土地との接続役って大事だけれど、イシワタさんがいるから「いっしょにやれそうな余白が残っている土地」という印象を与える。悩みが明確じゃないのも母性が発動する。あったりまえだけれど、それぞれの「このあたり」はみな違うということ、山山アートセンターの存在によって気づかされました。「あのあたり」でも「そのあたり」でもない「このあたり」同士で共存する術を模索しています。ぼくとイシワタさんは、似てるしわかり合っているようでいて絶妙に噛み合わないんだけど、それは近くて遠いこの距離のせいなのか、どうなのか。ぼくにとって福知山は別段思い入れのある土地ではないんです。それでも、遠いからこそ共にいられる、ということは今模索しています。

タカハシ 'タカカーン' セイジさん
インタビュー



タカハシ 'タカカーン' セイジ TAKAHASHI 'TAKAKAHN' SEIJI

すぞす人。大阪拠点。自身の表現活動と福祉をまたがる経験をもとに、「だんだん福祉施設になるセンター」をつくるために模索している。2020年4月、任意団体「NPOすぞすと、だんだん()なるセンター設立準備会」を設立。www.seijitakahashi.net

これは何の話なんだろう？

公庄仁(クリエイティブディレクター／コピーライター)

結婚式の当日に、新郎を交通事故で亡くした女性がいる。彼女は深く傷つき、精神科に通い、医師に尋ねる。「教えてください。なぜあの人は亡くなってしまったのですか？」精神科医は答えられない。たとえ事実だとしても「それはスピードを出しすぎたからです」と答えることに、なんの意味もないからだ。僕は事実だけでは生きていけない。そこに意味や理由や物語を立ち上げなければ、生きていけない。昔、どこかで読んだ話だ。

「山山アートセンター」の合宿ツアーが中止になった。これを書いている2020年3月。小中学校は休みになり、店や街からは人が消えた。いま、いったい何が起きているんだろう？なぜこんなことが起きているんだろう？もちろん世界は「新種のウイルスによる脅威」という、科学的に正しい事実を採用し、手洗いやマスク着用に精を出すことが奨励されている。

でも僕は、なんだか釈然としない。そもそも目にも見えず、手触りさえしないものなのだ。納得しろという方がおかしい。大昔の人なら「呪い」や「祟り」と思ったかもしれない。さすがに、いまそんなことを言い出す人がいたら、現代人は笑うはずだ。なぜなら僕はウイルスという「正しい」概念を持っているから。「バカだな、あれはウイルスと言うんだよ」「ウイルス……そうかウイルスと言うのか」「そうだよ、ウイルスだよ」「そうか……で、一体なんだそれは？」

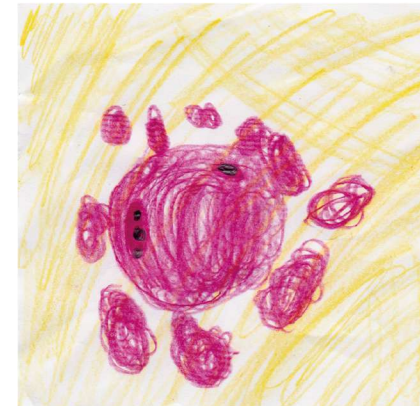
僕らはテレビ画面によく映る、顕微鏡で拡大されたあれを「コロナウイルス」と呼んで、納得している。だが、名付けたからといって、正体を理解できるわけではない。何なんだろう？なぜそんなものが生まれ、ここまで世界を混乱させているのだろうか？

「一体お前はさっきから何をうだうだ語っているんだ？新型ウイルスが蔓延しているんだろう。それ以上でも以下でもない」と頭の良い人は言うかもしれない。その通りこれは、ただの感染症で、また日常を取り戻すまで静観するという、シンプルな物語なのだろうか。僕にはそう思えない。

さらに言えば、トイレトペーパーが街から消えたのは、ウイルスのせいではない。人々が奪い合うマスクは、ウイルスの予防にならない。音楽ライブは中止され、小学生の日常は剥奪されたが、会社員は今日も満員電車で押し込められ、狡猾な政治家は騒ぎに乗じて特措法をこしらえた。そしてオリンピックの延期が決まったと同時に、東京で感染者が激増していることが発表された。本当のところ、いま何が起きているんだろう？

ここで話はまた、急に飛ぶ。僕の本職はクリエイティブディレクターで、企業からフィーをもらい、デザインの仕事に多く関わっている。「山山アートセンター」が冠した「アート」は近いようで、とても遠い世界だ。ときおり二つの違いを考えるのだが、デザインは「問

題を解決するもの」と捉えており、アートは「問題そのものを世界に提示するもの」ではないか、と最近思うようになった。どちらが優れているということはないが、問いは、答えより価値があるときがある。いま何が起きているのか真摯に見つめ、当たり前の事実疑問を投げかけることも、アートの役割である気がしている。



だからというわけでもないが、この文章は何ら具体的な解決の方向性も示さない(僕に示せるわけではない)。ただ誰も気に留めないことをつらつらと書いて終わる。答えのない疑問を投げかけることから、新たな可能性(物語や意味と言ってもいい)が立ち上がると思うからだ。大切な人を失った理由を「スピード超過の交通事故」と言われて納得できないように、僕らは、事実だけでは生きていけないのだ。

公庄仁 HITOSHI GUJO

クリエイティブディレクター・コピーライター。TVCMやグラフィックをはじめ、京都の老舗酒蔵のブランディングやスタートアップのミッション策定など、様々なプロジェクトに携わる。アジア唯一のパッケージアワードであるTopAward Asia、雑誌広告の日本最高賞にあたる経済産業大臣賞などを受賞。現在、福知山と東京を往復中。

このあたりにいる私達へ

青木彬(インディペンデント・キュレーター)

初めて山山アートセンターの存在を知ったのは2016年ごろに知人が持ってきた新聞記事の切り抜きがきっかけだった。京都のどこかの山の中で何かをやっている、という漠然とした印象で、そのおとぎ話みたいな肌触りが、東京で仕事に追われる頭の片隅にもぼつねんと残り続けていた。

それからひょんなことで、イシワタマさんと出会ったのは2018年の3月。5月には山山アートセンターを訪れることになり、2019年2月には京都芸術センターで私がキュレーションした「逡巡のための風景」に参加してもらうことになった。

「逡巡のための風景」という展覧会タイトルを思いついたのは、初めて山山アートセンターを訪れた時だった。訪れたと行っても、実際にはそういう名前のある場所があるわけではない。「山山が見えるところがアートセンター」というコンセプトに則れば確かに山山アートセンターだったと言えるわけだが、この時はイシワタマさんと金光寺から山々の景色を眺めていたのだった。

目の前にはただただ広がる山山が連なっていた。向こうの山からこちらを見れば、きっと同じようにただただ広がる山山の連なりだと思うのだろう。遠くに見る山という存在、その輪郭を形作る木々のディテール、そこで暮らす様々な動植物。自分がある山とあちらの山とでは、その距離感によって随分と肌触りが変わってくる。それはアートセンターなんて言葉に比べればとてつもないスケールを持っているようにも思う。

今、この原稿を書いている2020年3月、世界中で新型コロナウイルスの感染拡大対策として人々は他者との接触を避けなくてはいけなくなっている。多くの美術館は休館となり、音楽イベントや演劇公演も中止となった。人々の安全を優先することはもちろんだが、他者との身体的な距離感とは心理的には大きな負担となるのではないだろうか。感染拡大という状況は私たち人間にとっては大きな被害であるが、ウィルスにとってみればまた違った世界がある。ウィルスもある種の他者であるとする、現在の状況は「共生の想像力」が試されているような気がしてならない。そしてその想像力は、近年如実に失われていったように思うのだ。

家族、地域、国家。様々に規定される人々の集まりは、一人一人の「私」から成り立っている。そしてその大小様々な集まり同士の摩擦の中で疲弊したり、はじき出されたりする「私」がたくさんいる。そして集まりから「孤立」してしまった「私」は「個人」の名の下に「自立」することを強いられている。その「私」が本当は自分自身だったかもしれないのに。

きっとアートには共生の想像力を育む技術があるのではないかと思う。アーティストが社会を捉える視点、作品を作るための素材の選択や造形の技術、その作品に関わったり鑑賞することを通して見えてくるもの。それは合理的に行われる予想とも違う、まだ見ぬものへの想像力である。しかし、それは美術館やギャラリー、アートセンターと呼ばれる場所だけにあるわけじゃない。きっともっと些細な日常生活の中からだって変革は起こっているはずだ。毎日着る洋服だって、夕飯の支度だって、お風呂の入り方だって、アートという技術が使える瞬間は「私」達次第で拡がっていく。

山山アートセンターを象徴する言葉に「とにかく生きよう」という一言がある。イシワタマさんが考える「このあたり」には、とにかく生きようとする「私」達が溢れている。とにかく生きようとする不器用なイシワタマさんは、これまでの、もしくはこれから出会う「私」の姿なのかもしれない。だから、ここに集まる「私」達を大切することができなければ、私自身が生きる場所がなくなってしまう気がしているのだ。


また不器用なイシワタマさんからメッセージが届くのだろう。

今日もどこかの山の中でとにかく生きようとしている「私」がいるらしい。

東京はビルばかりだけど、ここからは見えない遠くの山山の景色を思い浮かべて生きていく。

青木彬 AKIRA AOKI

インディペンデント・キュレーター。1989年生まれ、東京都在住。社会的擁護下にある子供たちとアーティストを繋ぐ「dear Me」プロジェクト企画・制作、「ファンタジア!ファンタジア!—生き方がかたちになったまち—」ディレクター、「喫茶野ざらし」共同ディレクター、『逡巡のための風景』(2019, 京都芸術センター)ゲストキュレーターなど。



いろんな誰かが、入れ替わり立ち替わり。

大事なのは必ずしも
「たくさんの人で一堂に集まる」
ことではない。大事なのは
「いろんな誰かが、入れ替わり立ち替わり」。

対コロナとしても、
「過疎」を逆手にとっていくためにも、
「家」とか「地域」という呪縛から
解放されていく必要がある。
空があまりにも澄んでいるものだから、
そのことが身に沁みる。
世界がこの先どんなふうになったとしても、
晴れた空を仰ぐ自由は誰にも奪えまい。

「いろんな誰かが、入れ替わり立ち替わり」。
そうすれば、孤独だけれども孤独じゃない。
畑についていえば、
その準備がととのう前に鹿コミュニティに
先を越されてしまったたわけだけれど。

この春からガリベンジだ。

2019年度の活動記録

■よりあいまたけサロン

三岳会館(京都府福知山市ノ宮) | ゲスト:古川絵美(作業療法士) | 4/11, 5/9, 6/13, 7/11, 9/12, 10/10, 11/14, 12/12, 1/9, 2/13

■勉強会 教えてMr.ジョージ!認知症って何じゃらほい?

講師:稲岡錠二 | みねやま福祉会マ・ルート(京都府宮津市波路) | 9/18

■勉強会 居場所と役割ってなんじゃらほい?

講師:松本健史(松本リハビリ研究所) | みねやま福祉会マ・ルート(宮津市波路) | 11/27

■福祉とアートの噛み合わないトークシリーズ

合宿ツアー予告編「福祉施設で働きたい!?!」 | 登壇:奥山理子(みずのき美術館キュレーター)×イシワタマリ | Higashiyama Artists Placement Service (HAPS)(京都市東山区) | 10/25

福祉を「福祉」にとじこめない | 登壇:鈴木一郎太(株・大と小とレフ)×稲穂涼平(マ・ルート障がい部門主任)×イシワタマリ | みねやま福祉会マ・ルート | 11/13

清く正しく美しくないあなたへ〜ものごとの伝えかた〜 | 登壇:公庄仁(コピーライター)×榎田啓(児童養護施設てらす峰夢施設長)×イシワタマリ | 古本と珈琲モジカ(福知山市中ノ) | 12/5

生まれていごいて 死ぬ人たちのつどいの場(福島県いわき市地域包括ケア推進課からとんでもない人連れてきた) | 登壇:猪狩僚(igoku編集長)×イシワタマリ | 古本と珈琲モジカ(福知山市中ノ) | 12/13

合宿ツアー予告編:とにかく生きよう | 登壇:奥山理子×イシワタマリ | みずのき美術館(亀岡市北町) | 12/14

親の介護にワクワクしてもいいですか? | 登壇:平井万紀子(まあいいかlabo)×村松もも世(アパレル&ライフスタイル店舗ディレクター)×イシワタマリ | 古本と珈琲モジカ(福知山市中ノ) | 12/20

■大正琴演奏会

アケテラス(与謝野町明石) | 9/22

■ひとり一品持ち寄りごはん会(キッチンクラブ)

監修:笠間弥路(美術家) | みねやま福祉会マ・ルート(宮津市波路) | 9/24, 10/23, 11/13, 12/11, 1/15, 2/12

■とりあえず踊ろう(サルサダンス同好会)

発起人:松本泰子(理学療法士) | みねやま福祉会マ・ルート(宮津市波路) | 11/26, 12/3

■畑作業 晴れた空の下でなら会える ~あきらめから始まる畑~

3/21講師:ミヤサイ(百姓) | ためきの愛妻家のおじいさんの畑、天空の畑(福知山市ノ宮、上佐々木) | 3/14~3/22

ー以上、京都府地域交響プロジェクト支援事業「みんなで生きるー福祉を“福祉”にとじこめない」(京都市内で開催のものを除く)

■その他WSなど

山の上のお寺でヨガ | 講師:松尾圭子(わのくにのヨガ) | 金光寺(福知山市喜多) | 5/8, 6/5, 7/3, 9/4, 10/2, 11/6 | 教念寺(福知山市野花) | 12/4, 1/8, 2/5

山山こどもアート学校 | 講師:イシワタマリ、笠間弥路、球体アイ(陶芸家) | シンマチサイト(福知山市下新) | 4/14, 5/12, 6/9, 7/14, 8/11, 9/8, 10/13

絵本の世界であそぶ日 | 講師:藤山久美子(sazato和香)、イシワタマリ、西本ユウコ(nuno.sewing) | 農家民宿イワンの里(綾部市上八田町) | 4/25, 5/23, 6/27, 7/25, 9/26, 10/24

しなやかに!ベリーダンスを楽しもう!! | 講師:藤山久美子|楞厳寺(綾部市館町) | 2/1

山山アートセンターをつくる2019
YAMAYAMA ART CENTER IN PROGRESS

2020年3月 初版第1刷発行

企画・監修:
山山アートセンター

編集:
イシワタマリ、笠間弥路

デザイン:
浅井ゆうみ、西本ユウコ

写真撮影:
丸山桂(p.07-12, p.18背景, p.28-31)

作品タイトル:
笠間弥路 __ p.04『遠くの山』、p.06『岩山』
p.18『あの日の宇宙人』
p.22『our family』©mirokasama
むすひ __ p.26『COVID-19』
イシワタマリ __ 表紙『いつも心に山山を』

※本書の内容を無断で転載、複製することを禁じます。
©yamayama art center

発行:
山山アートセンター
www.yamayama-art.com | yamayama.art@gmail.com

助成:京都府(令和元年度地域交響プロジェクト支援事業)